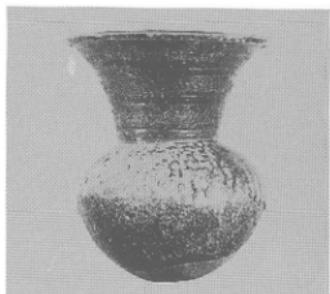


自然軸が目立つ。

これに対し、やや頸の短いもの(B)は三条の沈線が廻り、口縁部とそれぞれの沈線の間に櫛描波状文が廻り、外反する口縁端部は外側に肥厚し三角形の断面を呈している。また、前者と同様に体部に濃深緑色の自然軸が目立つ。

その特徴から後者が先行するもの  
と見られる。

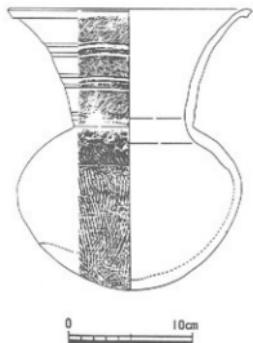


(B)

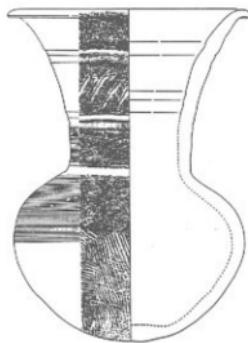


(A)

第46図 須恵器（大型広口長颈壺）



(B)



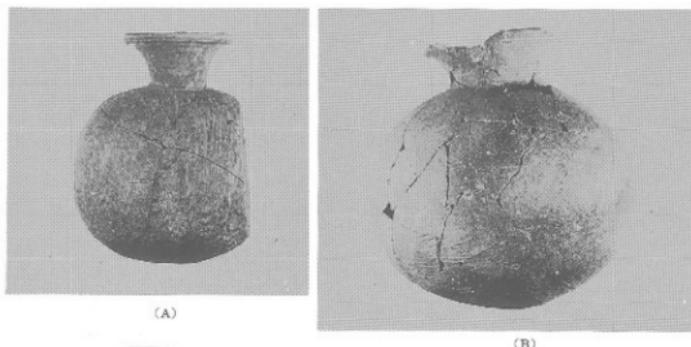
(A)

第47図 須恵器（大型広口長颈壺）実測図

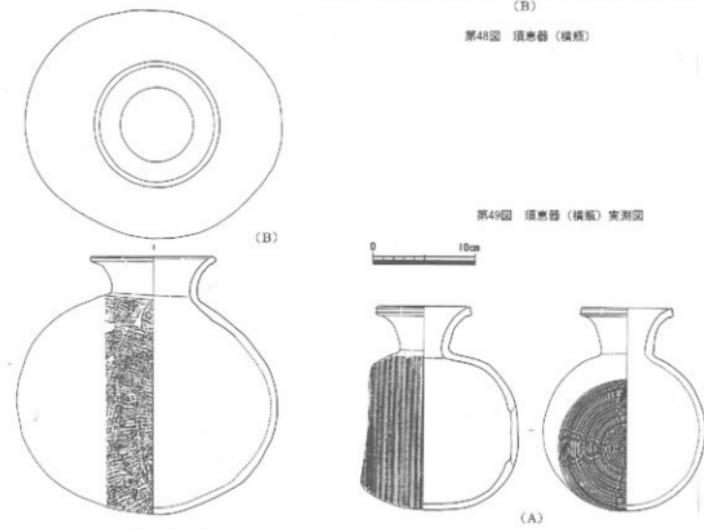
### (9) 横 瓶

形態の異なる横瓶が2点出土している。玄室南西隅の須恵器集中部から出土したもの(A)は、紡錘型の体部中央に装着された太い口頸部は端部で外側にやや肥厚し方形に整形されている。玄室南東側床面から出土したもの(B)は小型であり、器面

全体に回転搔き目調整が施された体部の片面は丸いが、他面は平坦である。口頸部は大きく外反し、外方に肥厚した口縁端部に一条の沈線が廻る。



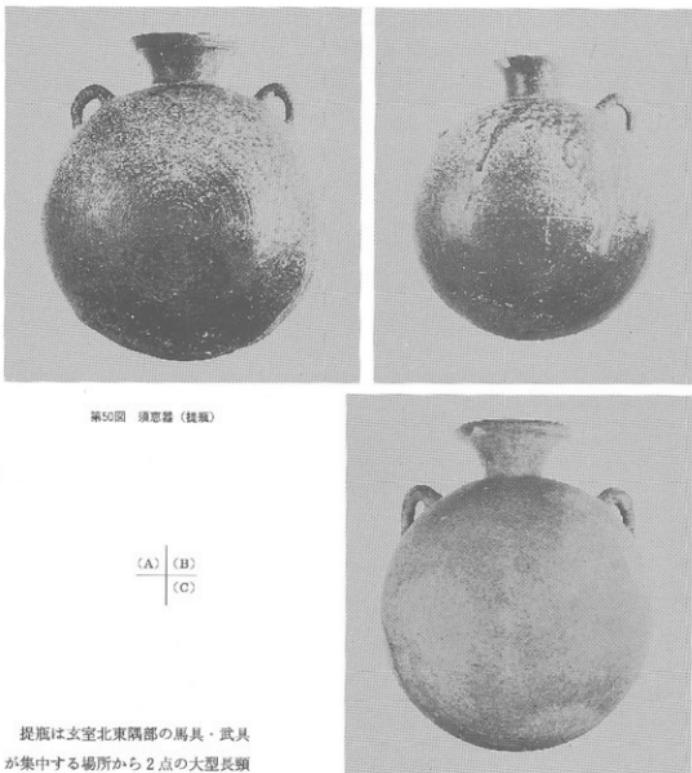
第48図 須恵器（横瓶）



(10) 提瓶

玄室南西隅の須恵器集中部から出土した2点は、大きさは異なるものの形態や焼成状況は酷似している。大型のもの(A)は体部の脛らみ面には提瓶特有の回転搔き目調整が施されており、平坦面側には指頭圧痕が全体に残る。体部側面に装着された短く外反する口頸部は、口縁端部が外側に三角形に肥厚し、その両側には環状の

把手が一对装着されている。小型のもの(B)は、大型の(A)がそのまま小型化されただけで、口縁端部が外側に肥厚しない以外の特徴は同じである。ただし(B)の体部の脹らみ面中央には十字のヘラ記号が認められる。

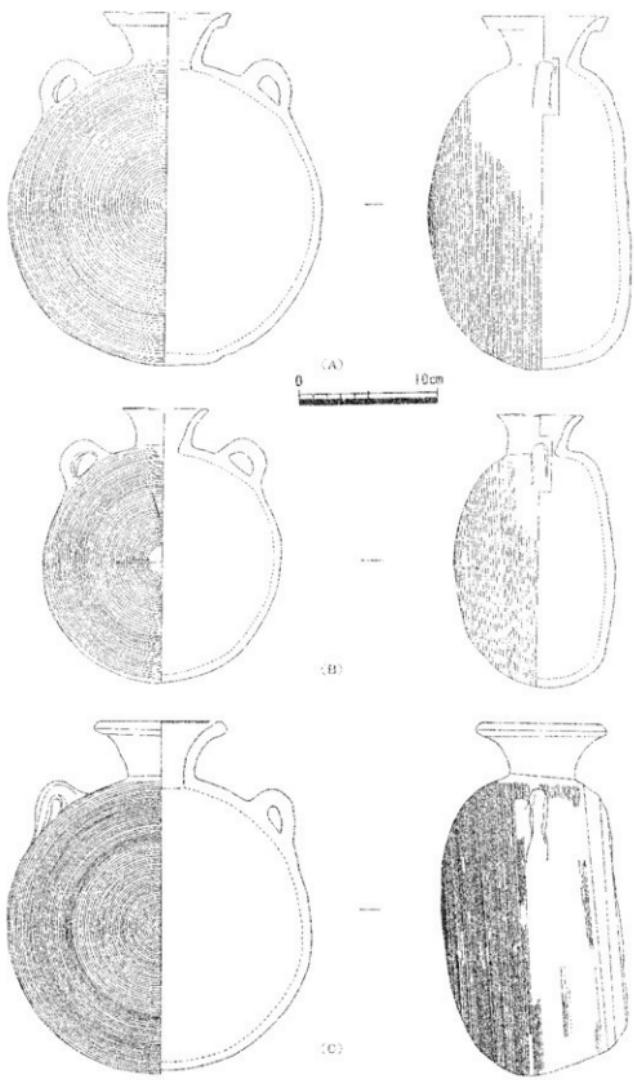


第50図 須恵器（銅瓶）

提瓶は玄室北東隅部の馬具・武具が集中する場所から2点の大形長頭広口壺と共にもう1点出土している

が、これ(C)は前述の2点とは形態が異なる。体部の脹らみ面側の回転搔き目調整や平坦面側の指頭圧痕は共通しているが、口縁部や把手が装着されている体側面は(A)(B)とは異なり平坦面を持つ。また口縁部は、口縁端部がやや肥厚し、丸味を帯びた方形の断面を呈している。

また、(A)(B)の焼成が極めて良好で、灰黒色の堅緻な器面に斑点状の黄灰褐色自然釉が認められるのに対して、(C)は全体が灰白色を呈しており軟質である。



55图 铜尊(经启)实测图

### (11) 大型器台

玄室南西隅の須恵器集中部から3点(A)(B)(C)出土している。

(A)は环部の底が丸味を持ち容量が大きく、6段透かし（上2段が長方形・下4段が三角形）の脚台に載る。环部の外面上方には櫛状工具による刺突文が太めの沈線で画された平面空間を埋める。下方は平行叩き調整で、口縁端部は上方にのびた後に外縁外側に肥厚している。

脚台部と环部の接合部では2条の沈線により突出した突帯にきざみ目が施されている。脚台部は中央部まで直下した後、大きく外反し安定度を高めている。透かしは5方向に穿孔されているが必ずしも等間隔ではない。

(B)は环部の底の丸味は小さく(A)より容量が小さい。6段透かし（上3段が長方形・下3段が三角形）を4方向に持つ脚台に載る。环部の外面上方



(C)  
(A) (B)

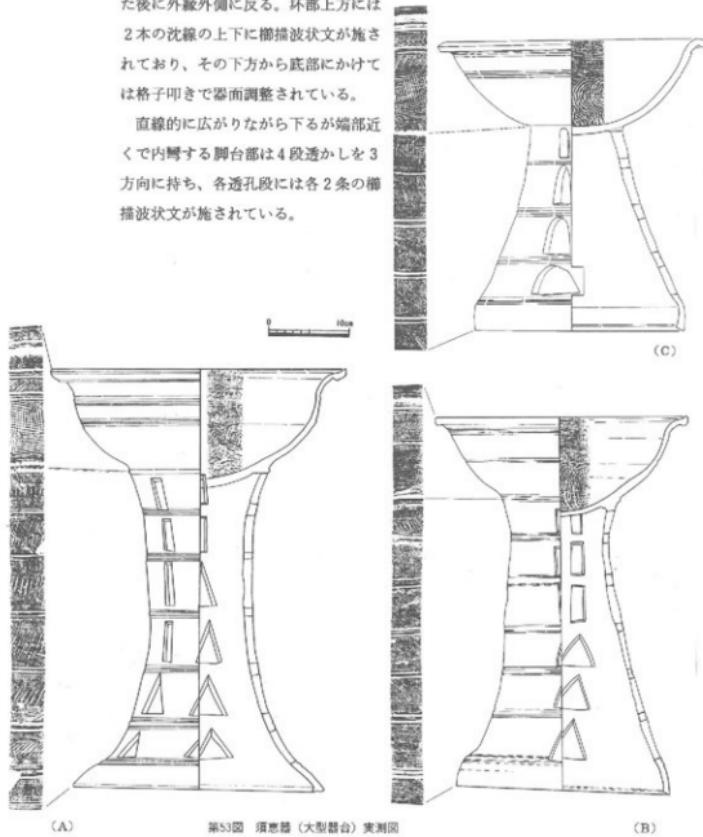


第52図 須恵器（大型器台）

には2本の沈線の上下に櫛描波状文が施されており、その下方から底部にかけては格子叩きで器面調整されている。口縁端部は上方にのびた後に外縁外側に反り台形に肥厚する。脚台部と杯部の接合部は2条の沈線により突出した突帯が廻る。脚台部は直線的に広がりながら下るが端部近くで内轉する。各透孔段には各2条の櫛描波状文が施されている。

(C)は(A)(B)と比べると小型であるが、その特徴は(B)に似ている。杯部の外面上方には2本の沈線による削り出し突帯の上下に櫛描波状文が施されており、その下方から底部にかけては格子叩きで器面調整されており、口縁端部は上方にのびた後に外縁外側に反る。杯部上方には2本の沈線の上下に櫛描波状文が施されており、その下方から底部にかけては格子叩きで器面調整されている。

直線的に広がりながら下るが端部近くで内轉する脚台部は4段透かしを3方向に持ち、各透孔段には各2条の櫛描波状文が施されている。



第53図 須恵器（大型器）実測図

(12) 脚台付子持壺

玄室南西隅の須恵器集中部から形態の異なるものが2点(D)(E)出土している。

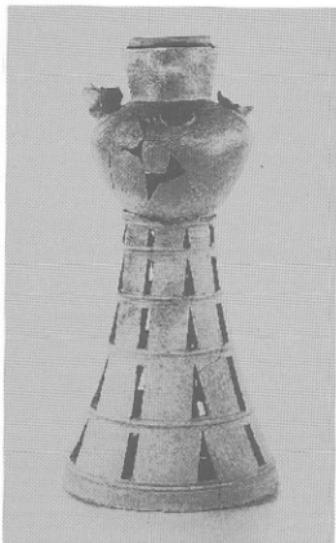
(D)は肩部の周囲4箇所に高さ6cm程の子壺を持つ有蓋壺が5段透かしの長大な脚台に載る形態のものであるが、小壺の大半は蓋と併せ失われている。

直線的に延びる口頸部にはヘラ先状の工具による線刻模様が巡り、頸部端には蓋受けのたちあがりを有する。壺底部と脚台部の接合部には坏部の存在を思わせる切断面が確認できるが、破片等は全く出土しておらず、副葬以前に失われていたと見られる。

脚台部の透かしは8方向5段に三角形と長方形が交互に穿たれ、各段には櫛描波状文が施されている。

(E)も脚台付子持壺であるが、こちらの母壺口縁部は上下二条の沈線の上段に櫛描波状文による装飾が施され、緩やかに外反する口縁端部は丸く肥厚しており、その肩部には5個の子壺が配置されている。母壺の体部中央から底部にかけては平行叩きで器面調整されている。

脚台部の透かしは6方向4段である。透かしの最上段は全て長方形で、以下は三角形と長方形が交互に穿たれ、各段には櫛描波状文が施されている。

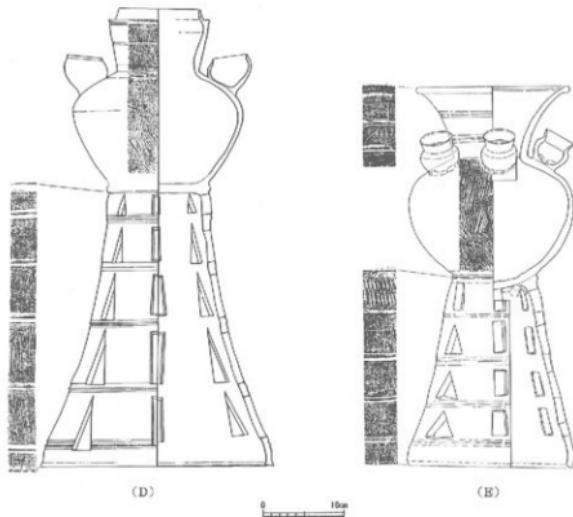


(D)



(E)

図54図 須恵器(脚台付子持壺)

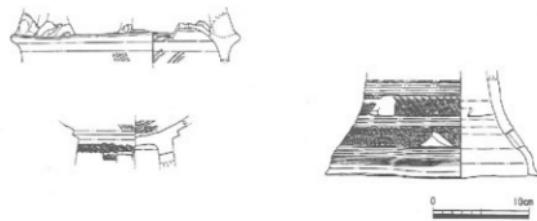


第55図 須恵器（脚台付子持壺）実測図

### (13) 装飾付器台

昭和57年度に石室内から出土した土器片の中に、上記3点の器台以外の大型器台の破片が含まれていた。また、これと接合可能な土器片が「昭和40年王墓山古墳出土」と記録され市立郷土館に保管されていたので併せて紹介する。

これは、坏部の口縁部周囲に人物等の人形が装着される形態のものと考えられるが、全て根元から折れ上部が失われているため詳細は不明である。



第56図 須恵器（装飾付器台）実測図

## II. 土 師 器

### (14) 壺

石屋形内の南東隅から土師器の底部が出土しているが、風化が著しく復元は困難である。

玄室奥壁沿いに立てられた石屋形の短側北側壁は上部を玄室奥壁に接し、下部でも玄室奥壁側と僅か25cmしか離れておらず、昭和57年度の発掘調査の際にはこの間の土は取り除くことが出来ていない。しかしながら、平成元年度に実施された横穴式石室の解体復元工事の際には玄室内で部分的な石屋形の解体も行われ、この時漸くこの部分の発掘調査を実施することが出来た。

石屋形の短側北側壁と玄室奥壁の間には、東端部分にブロック状態の角礫凝灰岩が置かれ、礫床はここで仕切られており奥部分に円窓は設かれておらず、一段低くなっていた。その辛うじて手の届く位置に土師器の壺が2点(A)(B)、共に横向きの状態で置かれていた。

(A)の胎土は比較的荒い砂礫を多く含み明褐色を呈している。器高13cm・最大径13cm・口径11cmで器壁は5~6mm、体部の形態はほぼ球形であり、口頸基部は9cm程度と大きく、口縁部は短く直線的に外反している。

(B)の胎土は細かく淡灰褐色を呈しており、器高17cm・最大径15cm・口頸基部は9cm、口径11.0cmを計り、器壁は4mm前後である。体部の形態は球形に近いものの最大径は体部の上方にあり、口頸基部は(A)よりは細く、その口縁端部には赤色顔料が付着している。

その特異な出土状況から、この土師器は葬送儀礼に関係する祭祀遺物ではないかと考えられる。

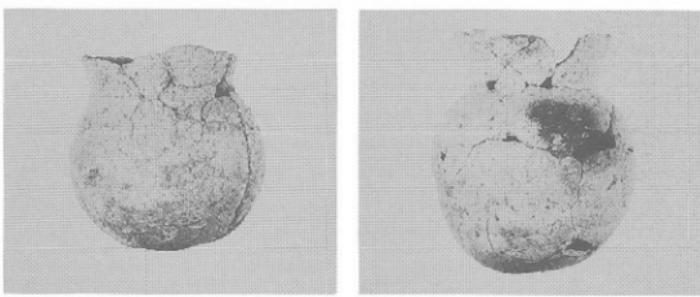


図57 土師器（壺）

### III. 馬具

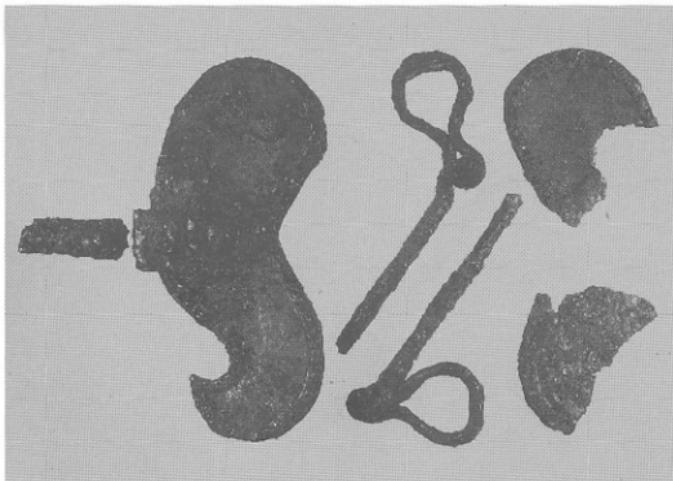
#### (15) 鉄地金銅張 f 字形鏡板付轡

石屋形内に転落した石屋形天井石上から、金銅製冠帽・素環鏡板付轡・梢円形杏葉等と併に出土した。出土状況の写真（42頁・第24図）を見ると、ほぼ完全な形で遺存していたことがわかる。石屋形天井石の落下状況等から、これらの遺物は当初から天井石上に置かれていたものと見られるが、天井石の転落時に移動しており、それぞれの配置等を明らかにすることが出来ないのは残念である。

鏡板の長さは21.0cm、幅は7.0～8.0cmを計る。鏡板部は鉄地板に金銅薄板を巻いた鉄板（継）を重ね、その縫部を6～7mm間隔で釦止めしているが、鍍金だけが金銅装のようである。衝端の輪の部分は表面から見えないようにキャップが被せられしており、この部分は更にキャップの上から釦で固定されている。釦頭は銀装である。

引手は鏡板の内側で衝端から駆がり、その先端には別造りの引手蓋が装着されている。また、鏡板の立聞から面繫へ駆がる長い釣金具が残る。

(15)以外にもf字形鏡板の破片、(16)以外にも素環鏡板片が出土しており、4組以上の馬具の存在が考えられる。

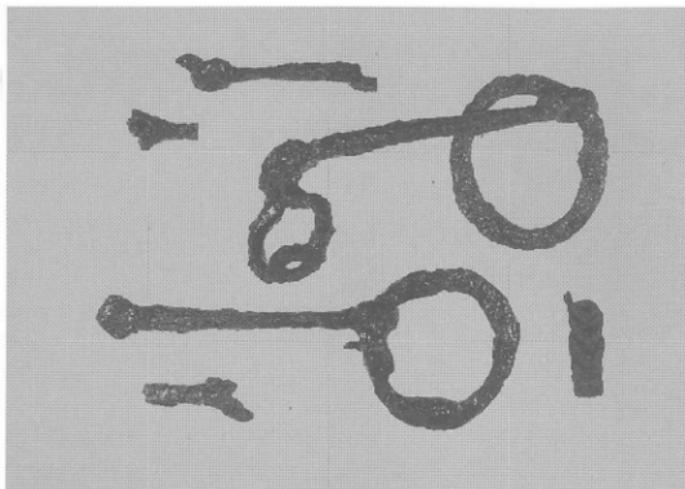


第58図 鉄地金銅張 f 字形鏡板付轡

#### (16) 素環鏡板付轡

鉄地金銅張 f 字形鏡板付轡等と共に、石屋形内に転落した石屋形天井石上から出土した環状鏡板付轡であり、出土状況の写真（42頁・第24図）を見るとやはり完全な形で遺存していたことがわかる。

櫛金具は兵庫鎖を立間とする素環の銅板、銜、引手部分からなり、兵庫鎖は5連が遺存している。また、引手の先端には別造りの引手壺が装着されている。



第59図 桂運鏡板付櫛

#### (17) 青銅製鈴付鉄地金銅張雲珠

馬具及び武具類が山積みに置かれていた玄室北東側隅部分の上部から出土した直径20cm程の鉄地金銅張の雲珠で、その中央部の径8.5cm、高さ2.0cmの突起に青銅鈴が装着されており、周囲には8個の蕾形の脛らみが取り附む。鉄地の表面に張られた金銅板は比較的厚く、全体に漫緑色を呈している。

青銅鈴は径6.0cm、装着棒長3.3cm、装着棒直徑0.8cm、孔幅0.5cmで、縦に装着されているため、模様は球体の上面半分に施されている。その表面は更に4区画に分けられ、その縁を1列の珠文を挟む2条の線で飾られた各区画内には篆手文が配置されている。

#### (18) 青銅製馬鈴

馬鈴は馬具及び武具類が山積みに置かれていた玄室北東隅部分の上部で、青銅製鈴付鉄地金銅張雲珠の周囲から3点出土している。鉄地金銅張雲珠に装着されていた馬鈴とは、装着方法や位置が異なるため形態や施文の位置も異なる。

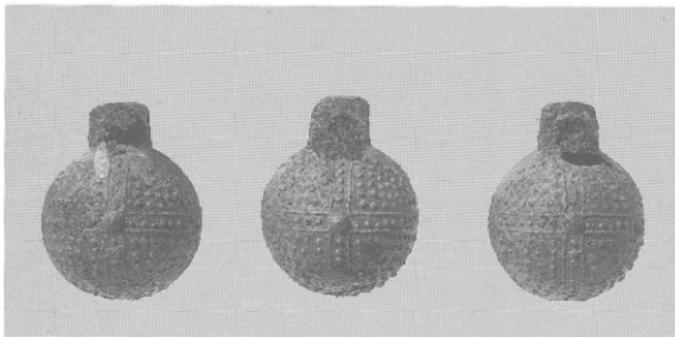
垂下用であるため施文の範囲は側面半分で、方形立間が付く。模様は1列の珠文を2条の線で挟む帯文で、十字形に4区画されており、扇形の各区画は一面の珠文で埋められている。また、十字中央の珠文のみ大きく、円錐形で先がやや尖る。

この3点の鉢は同范であり、径は5.6cm。范の破損状況から製作順も判別出来、鉢内部には2~3cm程の自然石の円礫（九）が保たれている。

施文や仕上げの籠底から見て、鉄地金銅張雲珠に装着されていた馬鉢と同一の工房の作品と思われる。



第60図 青銅製鉢付鉄地金銅張雲珠



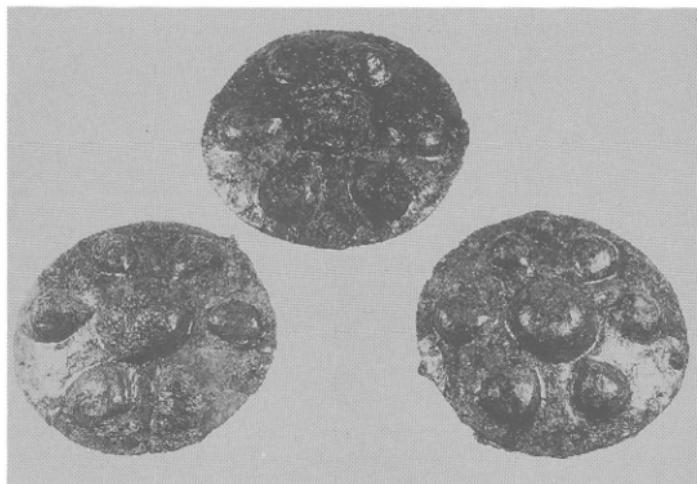
第61図 青銅製馬鉢

(19) 鉄地金銅張雲珠

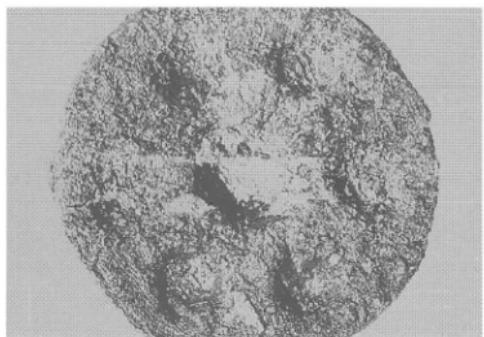
同様の形態のものが3点、馬具及び武具類が山積みに置かれていた玄室北東側隅部分の上部から金銅製馬具や馬鈴等と併に出土した。

直径は11~12cm程度で、表面の金銅は殆ど失われているが部分的に金箔が残る。中央に円形、その周囲に蓄形の突起が造られている。また、周辺には新止めの痕跡が認められる。

尻繋などを結合する脚の有無は確認できないが、裏面には荒く編まれた布の糸目が付着しており、尻繋の交点を飾っていた金具ではないかと思われる。



第62図 鉄地金銅張雲珠

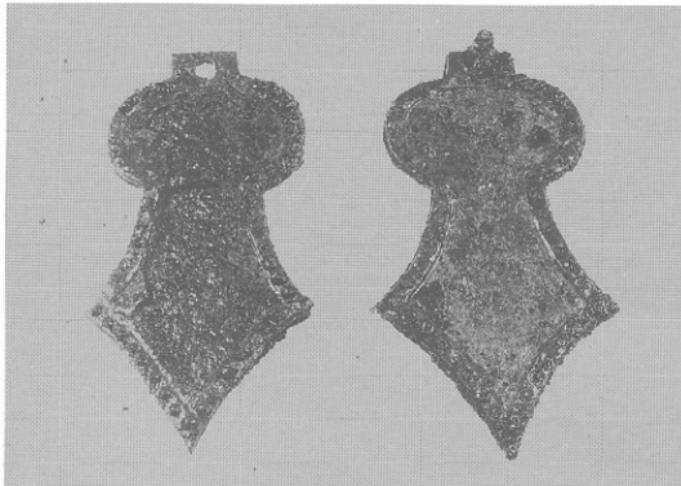


(裏面)

(20) 鉄地金銅張剣菱形杏葉

完形のもの 2 点の他に破片も出土しており、3 点以上副葬されていたものと思われる。全長は 18.5cm、扁円形部の幅 9.0cm・長さ 6.0cm、剣尾形部の長さ 12.5cm・最大幅 9.7cm を計る。鉄地板に同形の縁金をのせ、1 枚の金銅板を重ねて鋲留めしてある。鋲頭は銀装で鋲の間隔は約 10mm である。方形の立開を持ち、1 点のみ釣金具が装着状態で遺存している。その形態から、f 字形鏡板付櫛と同時期のものと考えられる。

完形の 1 点と破片は石屋形内裏床上から鉄製輪轂・精円形杏葉等と共に出土しているが、玄門部付近の床面上から出土した 1 点は、当初は石屋形天井石に他の杏葉と共に副葬されていたものが、天井石落下の際に移動した可能性が高い。



第63図 鉄地金銅張剣菱形杏葉

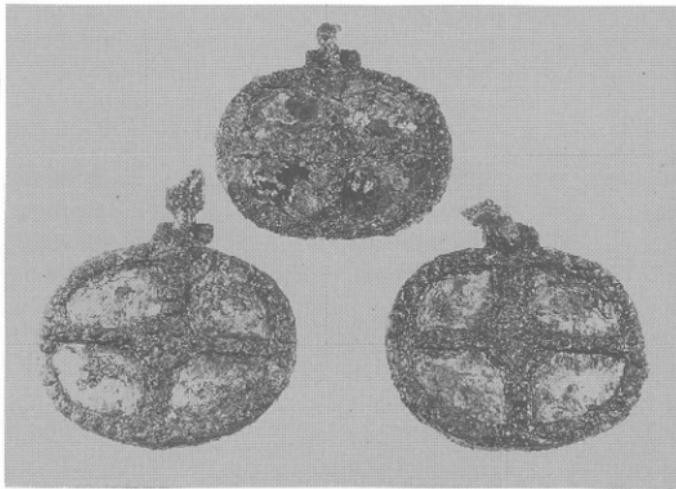
(21) 鉄地金銅張精円形杏葉

長径 11.0cm、短径 9.5cm の精円形杏葉が 3 点出土している。鉄地板に金銅板を挿むように鉄板（縁）を重ね、その縁部を 7 ~ 8 mm 間隔で鋲止めしてある。また周縁の縁金具から繋がる十字の鉄板が装飾的に張られて鋲留めされており、その中央部は小円形（直径 2.5cm）に広がり、それぞれ縁部と同様に鋲止めされている。鋲頭は銀装である。

立開は幅 2.7cm、長さ 0.8cm の方形で、3 点全てに釣金具が装着状態で遺存しているが、釣金具はいずれも短く上部は方形に加工されており、その 4 面に鋲の痕跡が認められる。

1 点は石屋形内に転落した石屋形の天井石上部から複数の櫛金具と共に出土し、

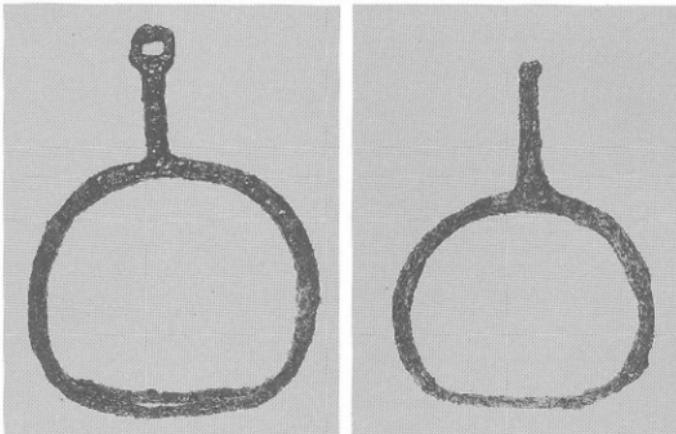
他の2点は石屋形内礎床上から鉄製輪燈・剣菱形杏葉片等と併に出土しているが、前述したように当初は石屋形の天井石上に副葬されていたものと考えられる。



第64図 鉄地金銅装飾円形香爐

(22) 鉄製輪燈

輪燈は石屋形内部(礎床上南方)から合計2点出土しているが、(A)は輪の幅17.5



(A)

第65図 鉄製輪燈

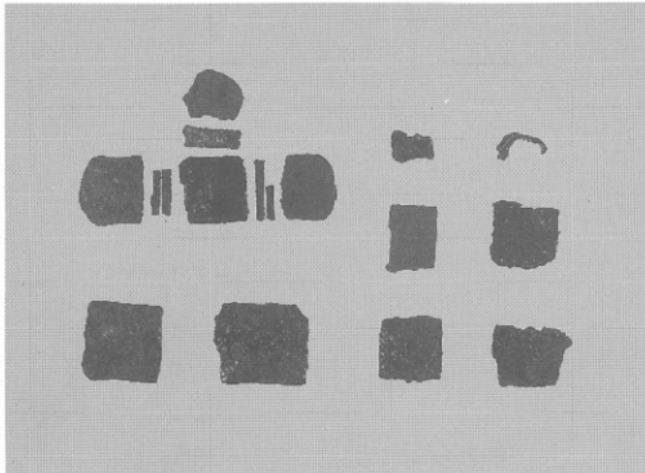
(B)

cm・高さ15.3cm、軸部は長さ5.0cmで上部に方孔を有する鎧鞘受け（縦2.9cm・横2.7cm）が設けられており、踏込部は滑止めの突起（1条に4箇所）を付けた2条に分かれているのに対して、(B)は輪の幅18.0cm・高さ15.0cm、軸部は長さ8.0cmで上部の鎧鞘受けと、2条に分かれた踏込部の一方は欠損している。造りは似ているものの軸部の長さが明らかに異なるため、一対のものではないと判断される。

この遺物も当初は石屋形の天井石上に副葬されていたものと考えられる。

#### (23) 鉢金具

対角線沿いに波を有する鉄地金銅張の小型方形の鉢金具（1辺2.0～2.5cm）と、同幅の半円形の鉢金具が多数出土しているが、それぞれの鉢金具には下に皮帯端を固定していたと見られる比較的長い紙が1本づつ接着されている。また、鉄地銀張の綱目刺み資金具が付着したものも認められることから、4点の半円形鉢金具が2条1組の綱目刺み資金具を介して、方形の鉢金具を取り囲む形式の鉢金具と見られる。方形の鉢金具は11点、半円形のものは10点、大半は石屋形内からの出土であるが、資金具も多数出土している。玄室北東側隅部分の鉄器集中部付近からも数点出土している。

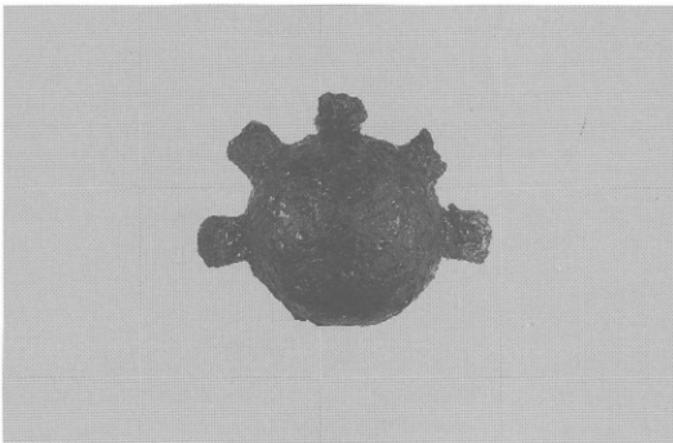


第66図 鉢金具

#### (24) 雲珠

転落した石屋形天井石上の鉄製素環鏡板付轡の脇から、伏鉢形で8本の方形脚を持つ雲珠（3本は欠損）が出土している。中央の伏鉢部は直径8.0cm・高さ2.5cm、方形脚は1辺が2cm程で、それぞれ中央に1本の紙の痕跡が認められる。また、複

数の方形脚上に賣金具が遺存している。

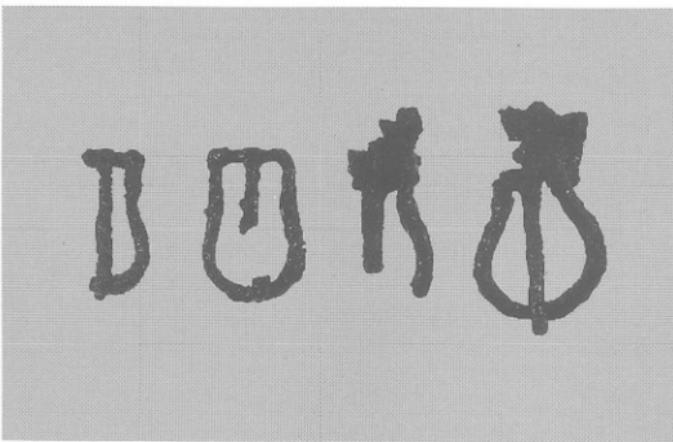


第67図 雲鉄

(25) 鉗具

5点以上の製品が確認出来るが、このうち2点（写真左2点）は4隅に鉗を持つ  
1辺3cm程の方形鉄板に固定されており、鞍に用いられていた鉗である。

いずれも石屋形内から出土している。



第68図 鉗・鉗具

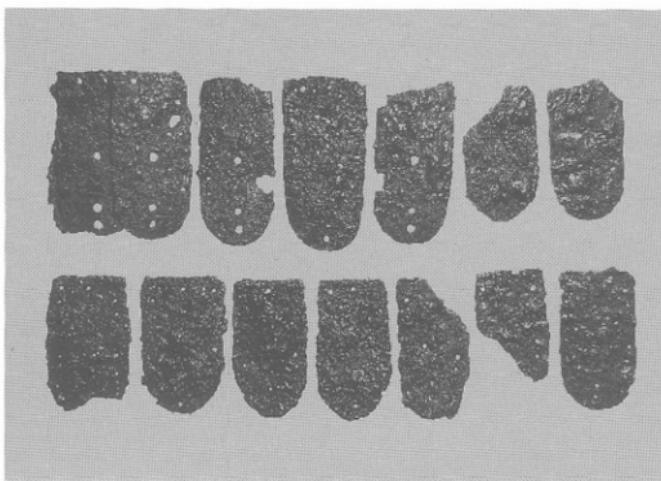
## IV. 武具(器)

### (26) 挂甲

玄室北東側隅部分の下部には馬具及び武具類が山積みに置かれていたため、挂甲や鐵が鋸により砕着し塊となっていたが、近年漸く解体と保存処理が完了し、多數の小札が確認出来た。皮紐を通し編まれた状態で遺存している部分も確認でき、小札に穿たれた小円孔に皮紐を通し、長さ7.0~7.5cm、幅3.0~4.0cmの小札を左右に1.0cmづつ重複連続し、更に上下に繋いで使用していることがわかる。

しかしながら他に小片となったもの多量にあり、正確な点数は不明であるが、1枚の平均重量は18~19g、全体の重量は3,850gであり、重量だけを考えれば約200枚の小札が存在したと考えられる。いずれにせよ、本来挂甲に使用される数から考えれば非常に少ないと。

またこのうちの7~8枚の小札に皮紐通しの孔以外にクサビ形の穴が認められる。穴の周囲は裏側に施れており、高速で飛来した先端の尖った鉄製品によるもの、つまり（片刃の長類式鉄鎌による）矢傷ではないかと思われる。出土した小札の数量の問題等と共に今後の研究課題である。

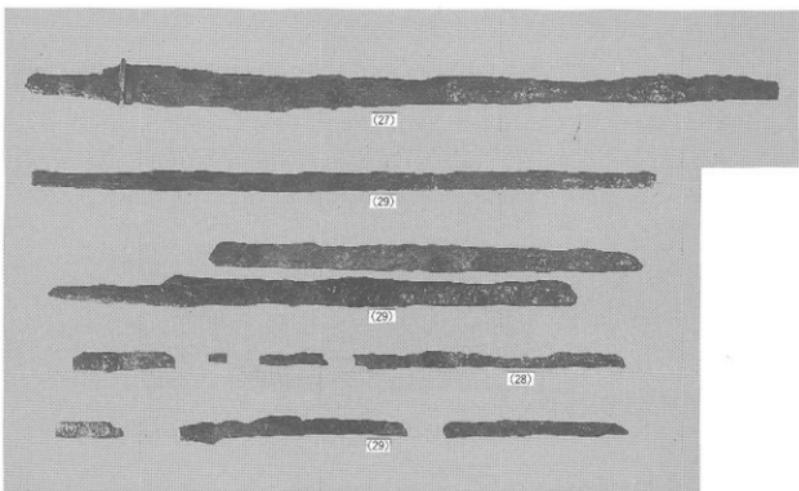


第69図 挂甲(小札)

### (27~29) 鉄刀

鉄刀は玄室奥壁沿い中央部（石屋形奥側短側壁脇）から5本出土している。このうち1本は損傷が著しく原型を留めていないが、2本は礎床面上から鉄鎌と共に、

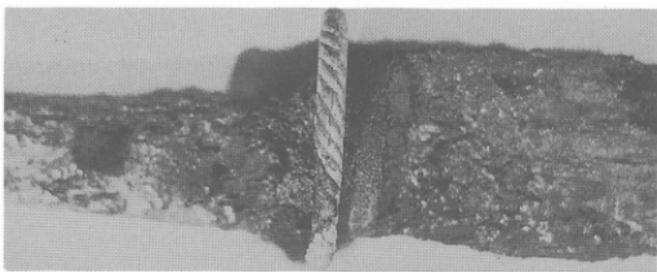
残る2本は奥壁に立て掛けられた状態で出土している。



第70図 鉄刀

(27) 銀装鈚付鉄刀

このうち壁に立て掛けられていた全長111.0(両端は欠損)、刀身幅6.0cmを計る大型のものには銀装の鈚が認められる。鈚は高さ7.3cm・最大幅5.4cmの倒卵形突出鈚で、銀組状に作られた銅芯を厚い銀箔で取り巻き、その縁には覆輪を装着している。

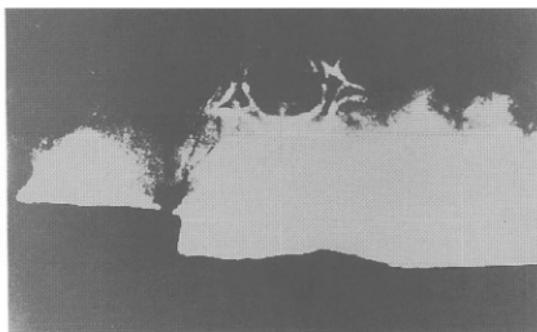


第71図 銀装鈚付鉄刀

(28) 銀象嵌装飾鉄刀

また、保存処理の過程で撮影されたX線写真により、42cmの鉄刀片の刀身に連弧輪状文の銀象嵌を有するものがあることが判明した。同心円を9個のU字形が取り囲む直径17mmの銀象嵌が刀身の鈚近くの両面に施されているが、同様の銀象嵌が上

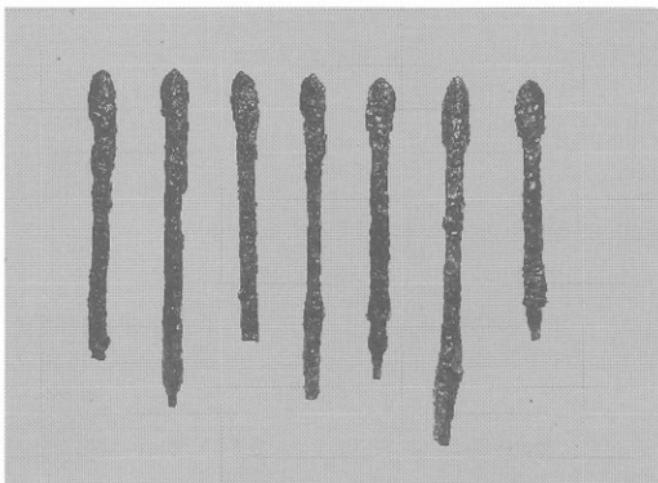
塙治篠山古墳（島根県）・江田船山古墳（熊本県）・新沢千塚古墳群（奈良県）等で発見されていることは注目できる。



第72図 銀象嵌装飾鉄刀（X線写真）

### (30) 鉄 錐

鉄錐は玄室奥壁沿い中央部（石室形奥側短側壁脇）の砾床上から多数出土しているが、幾つかのブロック毎に同一方向に揃っており、副葬時の原位置を保っているものと見られる。



第73図 鉄 锥

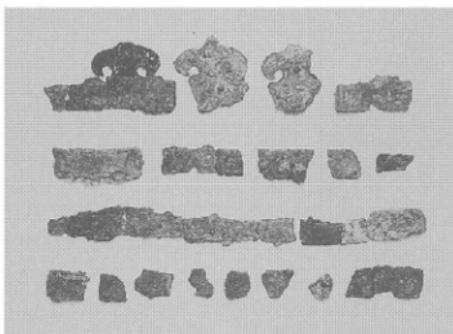
50本近く出土した鉄鎌は全て長頭式で、茎部分に矢柄とともに桜の樹皮（根巻）が遺存したものも認められる。鎌の刃部は両刃であり、左右の刃部の長さが同一のものと片方が長いものに分類できるが、これも破損したものが多く、詳細の報告は今後の整理分類作業の結果を待ちたい。

### (31) 弓（部分）

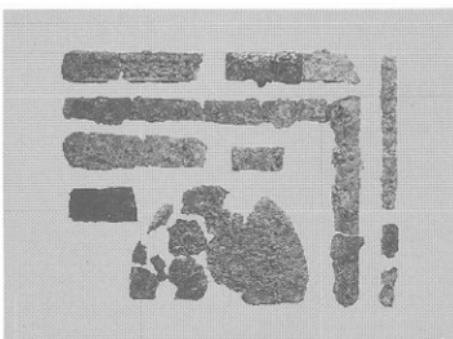
玄室奥壁沿いの武具集中部から出土した鉄器片を整理している際に、弓本体に装着されていたとみられる金具が数点出土している。多量の鉄鎌の出土から考えて弓の存在は疑い無いが、弓本来の姿が見えないのは残念である。

### (32) 胡 篦

玄室北東側隅部分の下部から出土した挂甲塊の解体中に、鉄地に金箔を張った波状列点文による装飾を持つ金具が出土している。木部は失われていたものの、半円形の底部(幅13.0cm・高さ8.5cm)や飾金具から胡篚と呼ばれる半円柱形の矢筒である



第74図 胡 篚  
(表面の飾金具)



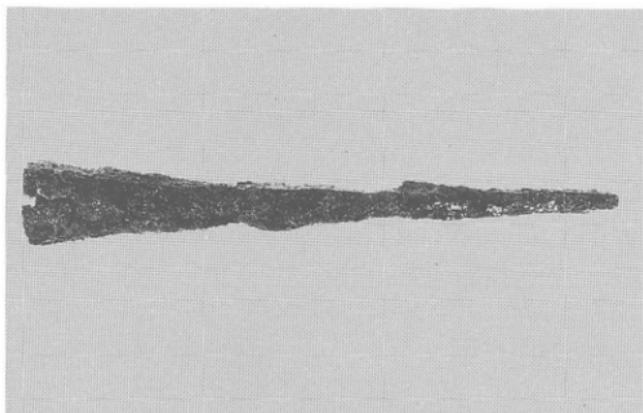
第75図 胡 篚  
(金具と底面)

ことが確認できた。

この遺物のみ現在も保存処理中であるため、規模や詳細は不明であるが、上縁部に三葉文の立飾りを有する装飾性の強いものであることがわかる。

### (33) 鉄 槍

玄室北東側隅の鉄器集中部から出土した先端の尖った鉄器である。柄は矛のように袋状に加工された部分に差し込み、横から釘で固定されていたようである。目釘が残る。先端部の断面が正方形であり刃部は認められず、鉄槍ではないかと考えられるが、何らかの工具である可能性もある。全長25.0cm・袋部の直径3.6cmを計る。



第76図 鉄 槍

## V. 装身具

### (34) 金銅製冠帽

王墓山古墳の被葬者について語る場合最も重要な遺物である。石屋形内に転落した石屋形の天井石上から鉄地金銅張f字形鏡板付轡・素環鏡板付轡・楕円形杏葉等と共に出土したが、冠帽は扁平に潰れていた。周囲の遺物が土圧等による変形が全く見られないこと、冠帽が横方向から冠帯を揃えて完全に潰れていたこと等から、副葬時に故意に潰されたものである可能性が高い。冠帽は奈良国立文化財研究所において、潰される前の形に復元・保存処理された。

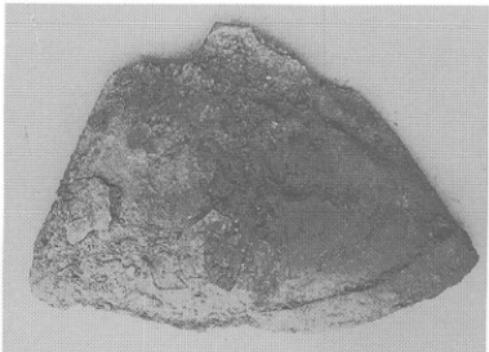
構造は細帯式冠に、本来は頭部に冠を固定する目的であった帽を金銅に造り変えて装着した特異なもので、他に類を見ない。

帽部分は、当初は非常に薄い4枚の三角形の金銅板を頂部からの延びる細い4本

の金銅帯上から千鳥掛に鉢止めし固定したものと考えられたが、実際は左右の三角形の金銅板は頂部で繋がっており、これと2枚の三角形の金銅板で造られていた。帽の表面は全面に小型円形歩摺が針金で装着されている。またH字形を呈する頭頂部の帯状金具部分には、何等かの装飾が付属していた可能性もあるが、損傷が著しく詳細は不明である。

冠部分は帽の下縁部に固定されている。幅約3cmの冠帶には両縁と中央に連珠文が打ち出され、中央の連珠文に沿って上下に列点模様が刻まれているが、3~4cm間隔で上には山形文、下には波濤文が認められる。また、冠帶には両縁に列点文、内部に波状文を有する立飾りが5本装着されている。立飾りは複数に枝分かれし各先端は宝珠形に終り、分岐点や先端に小型円形歩摺が針金で装着されている。

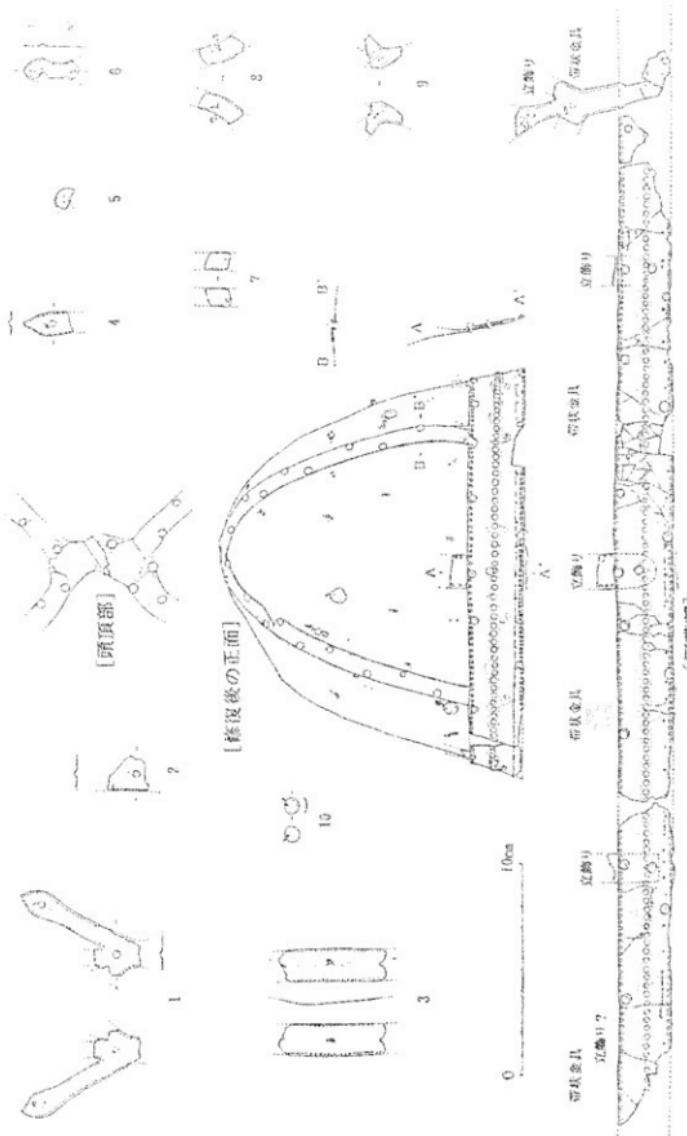
また、冠帶の下部に沿って1.5cm間隔で内部に布を縫い付けるための針穴が穿たれており、布の覆輪が存在していたと考えられる。



第77図  
金銅製冠帽  
(出土直後)

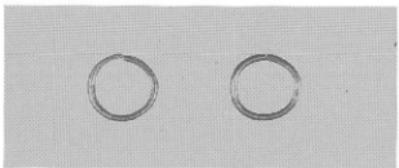


第78図  
金銅製冠帽  
(保存処理後)



### (35) 金 環

1組の金環が石屋形内北端から出土しており、その位置から被葬者の両耳に装着されていた可能性が高い。箔やメッキではなく直径1.5mm程の金線を加工したもので、左右16mm・上下15mmを計り、形状は正円ではなく歪みがある。また針金の太さも一定しておらず、輪の内側には工具による打撃痕が残る。

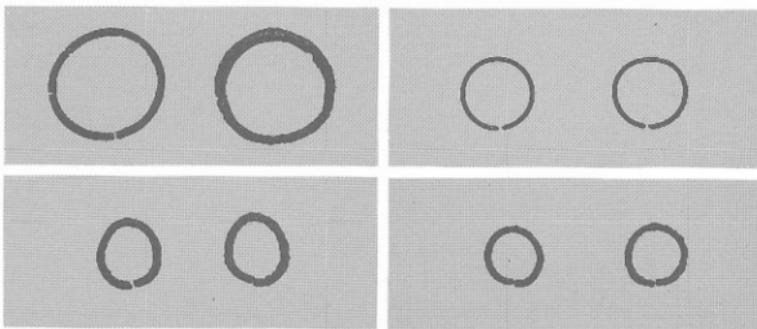


第80図 金 環

### (36) 銀 環

大きさや形態の異なる4組の銀環が出土している。石屋形と平行して礎床上に並ぶ、追葬時に設置された棺台の南東側から銀製空玉と併せて出土した撚り紐状の銀環(C)以外は全て石屋形内からの出土である。大型の銀環(A)は石屋形の北西隅部から、(B)(D)は散乱した状態で出土している。

- (A) 均整の取れた正円で直径35mm・銀線の太さは直径2.5mmで一定。
- (B) 均整の取れた正円で直径24mm・銀線の太さは直径1.5mmで一定。
- (C) 縦23~24mm、横20~21mm・太さ3mm前後の撚り紐状の銀線を使用。
- (D) 縦20mm、横19~20mm・太さ2mm前後の銀線を使用。



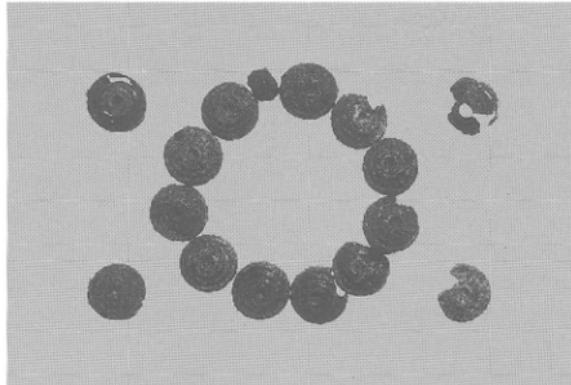
第81図 銀 環

### (37) 銀製空玉

直径10mm程の球形のものが1点と、有段鋤錐形のもの（直径17~18mm、厚さ8mm前後）が15点出土している。いずれも薄い銀板を片面づつ製作し貼付けて、接着線上両側に直径1mm前後の糸通しの孔が穿たれている。

有段部分の模様は鮮明で均整がとれており、型による打出しで量産されたものと考えられる。いずれも石屋形と平行して羅床上に並ぶ、追葬時に設置された棺台南東側からの出土である。

※写真的遺物の配列は  
出土状況等を示すも  
のではない。



第82図 銀製空玉

#### (38) 水晶製切子玉

大きさの異なるものが石屋形内部から9点出土しており、最大のもので左右23mm・最大径19mm、最小のもので左右16mm・最大径14mmを計る。この内7点は石屋形内の南西隅に集中して出土している。大型の製品4点は断面が8角形、中型の2点は7角形、小型の3点は6角形になるように面取りされており、穿孔はいずれも一方からのみ行われており、穿孔側での孔の径は4mm・反対側で1~1.5mmである。

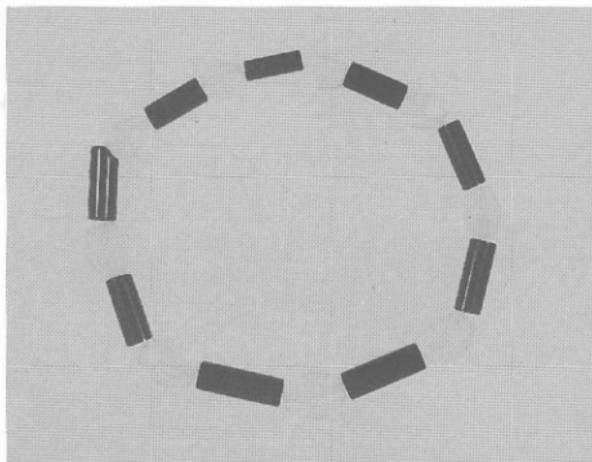
#### (39) 碧玉製管玉

碧玉製管玉は大半が石屋形内からの出土であり、北西隅部と南東隅部に集中して確認されているが、石屋形東側の追葬時の棺台南東側からも数点出土している。

大きさは様々で、材質も2種類に分類出来る。まず光沢のある濃緑色を呈するAグループは22点出土しており、最小のもので直径4.5mm・長さ13mm、最大のもので直径10.0mm・長さ30mmを計る。穿孔は水晶製切子玉同様一方向からのみ行われており、穿孔側での孔の径は1.5~2.5mm、反対側で0.7~1.0mmである。また穿孔側の面には、孔と同心円の研磨痕（直径5.5~7.5mm）が顕著で、穿孔用工具の擦痕と考えられる。

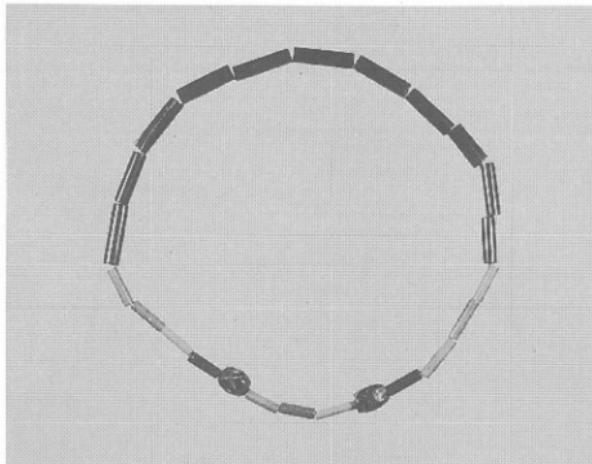
光沢の無い淡緑色を呈するBグループは9点あり、大きさは直径3.5~4.0mm、長さが13.0~16.0mmとはば一定している。また穿孔径は穿孔側で1.0~1.5mmで、両方

向から穿たれているようであり、Aグループとは異なる工房の製品と見られる。



※写真的遺物の配列は  
出土状況等を示すものではない。

第83図 水晶製切子玉と碧玉製管玉



※写真的遺物の配列は  
出土状況等を示すものではない。

第84図 碧玉製管玉と琥珀製纏玉

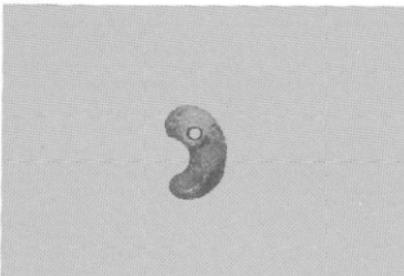
(40) 琥珀製纏玉

石屋形東側の追葬時の棺台南東側から銀製空玉等と共に3点出土した、半透明の

赤色を呈する琥珀製品で、長さ12mm前後・直径9~10mm、穿孔径1mm程である。両端と表面の一部は面取りされており最大径付近で三角形の断面を呈する。

(41) 琥珀製匂玉

石屋形内北端から出土した光沢のある淡緑白色を呈する琥珀製の小型の匂玉で、全長14mm、幅は穿孔側で4mm・尾側で3mm、穿孔径は1.2~1.8mmで一方向から穿たれている。



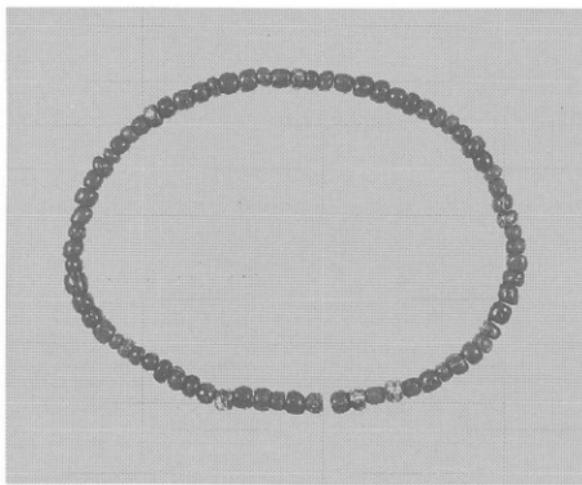
第85図 琥珀製匂玉

(42) ガラス製臼玉

石屋形の北側が被葬者の頭部とするなら、被葬者の胸部付近から多量に出土したコバルトブルーを呈するガラス製臼玉で、73点全て石屋形内から出土している。

大きさは最小のもので直径6mm・厚さ3mm、最大のもので直径8mm・厚さ8mmを計り、製作時の鉄芯による孔径は小さなもので1.2~1.3mm、大きなもので2.0mm、両端は研磨により面取りされている。

※写真の遺物の配列は出土状況等を示すものではない。



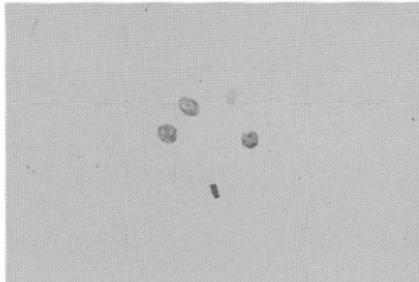
第86図 ガラス製臼玉

また光に透かして見ると、透明度の高いものと青黒く濁ったものが確認でき、不純物の混入により穿孔方向と平行に白色の細い縞模様が認められるものもある。

#### (43) ガラス製小玉

ガラス製品では白玉の他に黄色の小玉が石屋形内南西部から4点出土している。大きさは最小のもので直径3mm・厚さ1mm、最大のもので直径5mm・厚さ3mmを計り、製作時の鉄芯による孔径は1mmである。

石屋形内南西部から4点出土している。



※石製小玉については  
徳島県立博物館で世  
光X線分析して頂い  
たところ、銅・鉄の  
他、鉛・カルシウム・  
マンガン・スズ・スト  
ロンチウム等の元素  
が検出されている。

第87図 ガラス製小玉と石製小玉

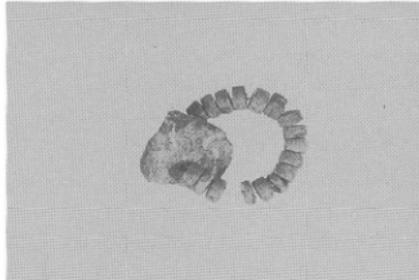
#### (44) 石製小玉

赤い自然石を加工した小玉で形態は滑石製小玉と同一である。直径3mm・厚さ1mm、穿孔径1mmを計る。石材の種類は不明である。

#### (45) 滑石製小玉

淡茶灰色を呈する滑石製小玉が18点出土しているが、このうち17点は石室内部から運び出された埋土のふるいがけにより確認されたものであり、正確な出土位置は不明である。

厚さは1.0~2.5mmと幅があるが、直径はいずれも4.0mm前後で穿孔径も1mm程度と共に通しており、まず棒状の材料を製作し、これを小さく切断したものと見られる。



※写真の遺物の配列は  
出土状況等を示すも  
のではない。

第88図 滑石製小玉と滑石製有孔円盤

#### (46) 滑石製有孔円盤

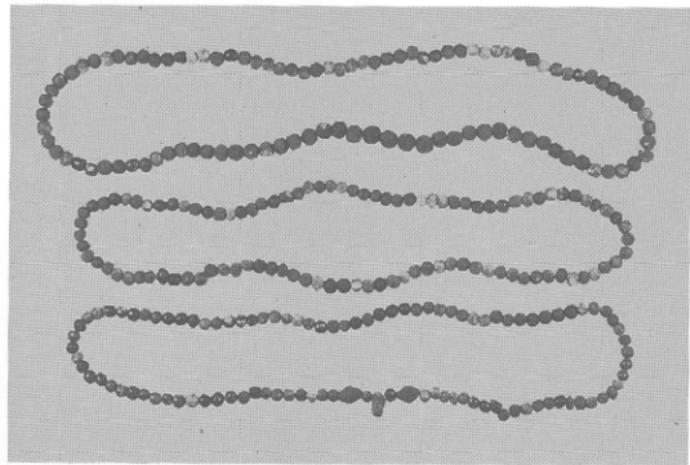
淡茶灰色を呈する滑石製小玉と同材質による孔円盤が、石屋形内ほぼ中央部から出土している。最大径は17mmで、周囲は荒く削られており円形を呈していない。厚さは一定しておらず4~6mm程度で、中央に直径2.5mm程の孔がある。装飾品ではなく、祭祀遺物としての性格を持っていると考えられる。

(47) 土製丸玉（土製勾玉と切子玉形土玉）

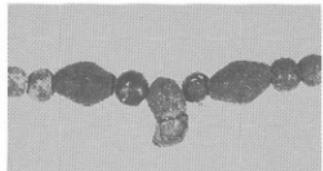
玄門部や石屋形の西側長側壁沿いに集中した部分も認められたが、石屋形内を含む玄室内一面に散乱した状態で350点近い土製丸玉が出土している。後の整理作業によって、この中に全長15mmの土製勾玉1点と全長13mm・最大径10mmの、水晶製切子玉を模したとみられる土製品が2点含まれていることが判明した。

第89図  
土製丸玉

※写真の遺物の配列は  
出土状況等を示すも  
のではない。



第90図  
土製勾玉と  
切子玉形土玉



丸玉は最小のもので直径10mm・厚さ10mm、最大のもので直径6mm・厚さ5.5mm、孔径1mmとほぼ一定しており、遺存状況の良いものの表面は黒く光沢があり（胎土は淡茶灰色）、何か特殊な加工が施されている様子が解る。

土製品であることや出土状況等から、純粹な副葬的性格を持った遺物ではなく、葬送儀礼に伴う祭祀遺物のようにも思われる。

## VI. 工 具

(48) 鉄 斧

玄室北東側隅部分の鐵器集中部分から出土した袋状の鉄斧で、全長8.7cm・刃幅6.6cm・袋部の直径2.6cmを計る。唯一の鉄製工具である。

(49) 破 石

玄室南西隅の須恵器集中部分の東側床面から出土した砂岩製と思われる黒灰色の